一般社団法人日本カウンセリング学会 第55回大会

プログラム

VUCAの時代とカウンセリング

〔研修会・大会：オンデマンド配信〕
2023 年 8 月 4 日（金）～ 9 月 18 日（月）

一般社団法人日本カウンセリング学会 第55回大会準備委員会事務局

●　目　次　●

◆　研修会のご案内 ・・1
◆　大会参加者へのご案内 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
◆　学会理事長講演 ・・5
◆　大会準備委員長講演 ・・6
◆　大会基調講演 ・・・8
◆　会員集会（学会賞受賞式、次期大会長挨拶など）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
◆　日本カウンセリング学会奨励賞受賞者講演　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
◆　大会準備委員会企画シンポジウムⅠ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13
◆　大会準備委員会企画シンポジウムⅡ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
◆　カウンセリング心理士会企画シンポジウム　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
◆　若手・中堅の会企画シンポジウム　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
◆　自主企画シンポジウム　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
◆　ポスター発表　・・21

日本カウンセリング学会「カウンセリング心理士新養成カリキュラム」準拠

第55回大会研修会のご案内

日本カウンセリング学会第55回大会にあたり、以下の研修会を開催いたします。

研修形態：全研修コース、オンデマンド配信です。

配信期間：2023年8月4日（金）～ 9月3日（日）迄　1ヶ月間

研修時間：全研修コース 2.5 時間です。

コース	研修タイトル	講　師
1	キャリアカウンセリング入門　（A①：カウンセリングの理論と実際）	原　恵子（筑波大学）
2	ほんものの傾聴を学ぶ：ロジャーズに学び直す　（A②：来談者中心的アプローチ）	諸富祥彦（明治大学）
3	ＥＡＭＡ（自己探究カウンセリング）グループ ロジャーズをもとにした統合的アプローチ　（A⑥：現代のカウンセリング理論・技法）	諸富祥彦（明治大学）
4	動機づけ面接　（A③：認知行動的アプローチ）	沢宮容子（筑波大学）
5	認知行動療法の代表技法：シェイピングでの行動形成　（A③：認知行動的アプローチ）	中村恵子（東北福祉大学）
6	生物心理社会モデルのケースフォーミュレーション　（B②：心理アセスメントの理論と実際）	中村恵子（東北福祉大学）
7	コンパッション・フォーカスト・セラピー　基礎編　（A③：認知行動的アプローチ）	石村郁夫（東京成徳大学）
8	コンパッション・フォーカスト・セラピー　応用編　（A③：認知行動的アプローチ）	石村郁夫（東京成徳大学）
9	箱庭療法　理論篇　（A④：精神分析的アプローチ）	渡部純夫（東北福祉大学） 内藤裕子（東北福祉大学）
10	箱庭療法　実践篇　（A④：精神分析的アプローチ）	渡部純夫（東北福祉大学） 内藤裕子（東北福祉大学）
11	ジェンダーの視点を活かすカウンセリング　（A⑥：現代のカウンセリング理論・技法）	布柴靖枝（文教大学）
12	「感情労働」を正しく知る！―対人支援と自分のしごと、双方に活かす感情労働の捉え方― （A⑥：現代のカウンセリング理論・技法）	関谷大輝（東京成徳大学）
13	WISC-V　理論篇　（B③：心理検査の理論と実際）	小林　玄（東京学芸大学）
14	WISC-V　実践篇　（B③：心理検査の理論と実際）	小林　玄（東京学芸大学）
15	KABC-II　理論篇　（B③：心理検査の理論と実際）	三浦光哉（山形大学）
16	KABC-II　実践篇　（B③：心理検査の理論と実際）	三浦光哉（山形大学）
17	発達障害の子どもに対する通級指導での神経行動教育学的介入　（F③：教育分野のカウンセリング）	坂本條樹（共立女子大学）
18	発達障害とデザイン　（F③：教育分野のカウンセリング）	三谷聖也（東北福祉大学）
19	大規模自然災害において被災者を支援するということ（基礎編） ― 初期支援の基本のキ ―　（F⑥：コミュニティ・カウンセリング）	狐塚貴博（名古屋大学） 若島孔文（東北大学）
20	大規模自然災害において被災者を支援するということ（実践編） ― ブリーフセラピーからの接近 ―　（F⑥：コミュニティ・カウンセリング）	若島孔文（東北大学） 狐塚貴博（名古屋大学）

受講準備のために

ネット環境のチェック

ご使用になりたい端末がWeb 会議など可能な状態か否かを調べてください。

＊グーグル検索で［スピードテスト］と入力して検索する。

＊［インターネット速度テスト］が表示されたら、右下の（青い枠）［速度テストを実行］をクリック

＊テストの結果、可能な状態かどうかが表示される。（あくまでも目安のテストです。）

一般的に、ストレスなく通信できるのは10Mbps（スマホは5Mbps）～ 30Mbps 程度と言われています。

参加方法について

1　オンデマンド配信視聴の参加方法について

オンデマンド配信期間中に、大会HPトップページの「参加はこちら」ボタン、もしくは、研修会のご案内ページ下部にある「参加・発表申込ページへ」ボタンより、下記を入力の上、ご参加ください。

・ご登録いただいたアカウントID (E-mailアドレス)

・ご登録いただいたパスワード

8月4日（金）より視聴可能となりますので、9月3日（日）までの期間内にご視聴ください。

2　講座の資料は研修会の視聴ページにてダウンロードできます。（研修会時にご自身で使用される目的以外の複製禁止）

3　研修会動画の録画・撮影・転載を禁じます。また、研修で紹介される事例にはフィクション加工を施しておりますが、内容に関する守秘は厳守願います。

4　**レポート提出について**

各資格の更新ポイントにかかる証明書の発行を希望する方は、視聴後期日までのレポート提出が必須となります。（学校心理士の更新ポイントを希望する人は、ご自身が当該研修講座内で重要と考えられたキーワードをレポートの巻末に5語記載してください。）レポートの提出をもって、証明書を発行いたします。

＊提出可能期間：8月4日（金）～ 9月23日（土）

・レポート提出方法：大会HP研修会のご案内ページ内「参加・発表申込ページへ」ボタンよりご登録済のIDとパスワードでログインいただき、メニューページ内の「レポート提出」ボタン内より期間内に提出ください。

・レポート内容：ワードファイルにレポートを作成いただき、ファイルをアップロードしてください。なお、レポートの書式、内容、長さに規定はないので、自由に感想をお寄せください。

・研修証明書発行期間：9月下旬以降

参加費の領収書について

研修会参加申込の領収証は、大会HP研修会のご案内ページ「参加・発表申込ページへ」ボタンよりご登録済のIDとパスワードでログインいただき、メニューページ内の「研修会参加申込内容の確認」ボタン内より2023年10月31日（火）までダウンロード可能です。

参加証について

8月4日（金）以降、上記領収書と同様の手順でログインいただき、メニューページ内の「研修会参加申込内容の確認」ボタン内より2023年10月31日（火）までダウンロード可能です。

研修会（大会）は各有資格者の更新ポイントとして認められています

カウンセリング学会カウンセリング心理士　更新ポイント

研修会の受講者　　2.5×2＝5 時間　2P　　（大会参加者　2P）

臨床心理士資格更新ポイント

研修会の受講者　2P　（大会参加者　2P）

学校心理士資格更新B1

研修会の受講者　1P

＊今大会では、学校心理士の受講証明書は、ご希望の方のみへ発行いたします。

学校心理士のポイントの取得をご希望の方は、研修証明書に加えて、「学校心理士資格更新B該当単位研修ポイント」の証明書が発行されます。研修のお申し込みの際に「研修証明書＋学校心理士の証明書」にチェックを入れてください。

修了証について

受講者には、日本カウンセリング学会理事長の修了証が発行されます。

・レポート提出後にご登録いただいたメールアドレス宛にお送りいたします。

大会参加者へのご案内

大会オンデマンド配信への参加方法について

オンデマンド配信期間中に、大会 HP トップページの「参加はこちら」ボタン、もしくは、大会参加登録ページ下部にある「参加・発表申込ページへ」ボタンより、下記を入力の上、ご参加ください。

・ご登録いただいたアカウント ID (E-mail アドレス)
・ご登録いただいたパスワード

※大会への参加がご招待の皆様へは、別途ご案内をさせていただきます。

インターネット環境に関する不具合は、主催者側では対応いたしかねます。
各自インターネット環境の調整をお願いいたします。

大会発表者へのご案内

大会オンデマンド配信期間中の Q&A について

大会プログラムのうち、「掲示板」が設置されている演題につきましては、参加者からの質問、コメントに対して、配信期間中にご返答くださいますようお願いいたします。

学会理事長講演

カウンセリングのこれから

沢宮　容子（筑波大学）

講演概要

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の脅威が世界に広がってから3年が過ぎようとしています。この間、社会的孤立や経済的苦境、健康不安など、多くの人々が様々な問題を抱えるようになりました。このような状況下で、カウンセリングにはますます大きな役割が求められています。会員の皆様におかれましては、多大な努力を重ねながら、カウンセリングの実践、研究、教育等にご尽力されていることに、心よりの敬意を表します。

カウンセリングに関わる専門家は、人を「病気でない」状態にするプロセスだけでなく、人が「健康になる」プロセスにも焦点を当てなければなりません。では、「健康になる」とはどういうことでしょうか。真の健康とは、単に不健康ではない状態というだけではありません。単に、良い気分でいるという、快楽的状態でもありません。心が満たされた良好な状態を保つことです。不健康な状態を脱することさえできれば、心の健康に関する問題が解決するわけではないのです。

この 3 年間で、Zoom や Teams などの Web コミュニケーションツールの一般化、リモートワークの普及など、いわゆるデジタル・トランスフォーメーション（DX）が一気に加速しました。コロナが DX の進行に拍車をかけた形です。これらはカウンセリングのあり方にも大きな影響を与えています。本講演では、私の考える「カウンセリングのこれから」について、お話をしたいと思います。

大会準備委員長講演

新海誠監督作品の「すずめの戸締り」からみた東日本大震災のこころの傷

渡部　純夫（東北福祉大学）

講演概要

東日本大震災から12年の年月が過ぎ、世間はその事実を忘れたようにすら感じられます。しかし、被災者のこころの中では、いまだ震災が継続中であったり、あの日以来時間が止まってしまった人もいます。昨年、新海誠監督が「すずめの戸締り」という映画を発表しました。この中で自然災害として東日本大震災を「ミミズ」という名の下に描いております。第55回大会が仙台の東北福祉大学で開催させていただくにあたり、どうしても取り上げなければならないテーマと考えております。

話の柱として、

1. 東日本大震災を振り返る
2. 新海誠監督作品「すずめの戸締り」について
3. 新海誠監督がすずめに託した東日本大震災のこころの傷について
4. どうしたら東北を癒やすことが可能なのか
5. これからの東北の展望について

の5つを取り上げてみたいと思います。

東日本大震災のトラウマ体験から、いまだに抜け出しきれていない多くの人にとって、この「すずめの戸締り」の与えるインパクトは少なくはなかったと思います。例えば、福島を考えれば未だに震災は終息しておらず、継続中であります。そのような被災者の思いを心の片隅に忍ばせながら、「すずめの戸締り」とは我々東北の人々や若者の心理的自我の確立にどんな意味をもつことになるのかを考えてみることにしたいと思います。

「すずめの戸締り」は主人公であるすずめが扉を閉めることではなく、こころに傷を負った母親の喪失体験と向き合うことにあるのではなかろうかと考えます。扉を閉めるのではなく、開けることで抑圧してきた喪失体験と向き合うことであると考えることができるかと思われます。このようなことを、カウンセリングの視点を絡めながら考えてみたいと思います。

プロフィール

（現職）

東北福祉大学総合福祉学部福祉心理学科教授・東北福祉大学大学院総合福祉学研究科教授。東北福祉大学学生支援センター長。福祉心理学科学科長。東北福祉大学硬式野球部部長。学校法人栴檀学園評議員。学校法人福聚幼稚園評議員。東北福祉大学後援会代議員。入学者選抜委員会委員長。

（主な資格等）

臨床心理士。福祉心理士。産業カウンセラー。

（学会活動、社会活動等）

日本福祉心理学会理事。日本福祉心理士会理事。日本箱庭療法学会・日本ユング心理学会震災 WG 委員。日本臨床心理士会代議員。日本心理臨床学会代議員。日本臨床心理士養成大学院協議会理事。児童養護施設青葉学園評議員。

福島大学付属小学校評議員。福島県警察本部委嘱被害者カウンセラー。

（主な学歴・職歴）

文教大学人間科学部卒業

筑波大学大学院教育研究科修士課程修了

神奈川県総合リハビリテーションセンターに就職。その後、総合会津中央病院で臨床心理室長として勤務し、会津大学・福島大学・郡山女子大学・山形大学・桜の聖母短大等の非常勤講師を経て、東北福祉大学非常勤講師、専任講師・准教授を経て現職。

（主な著書）

『福祉の時代の心理学』（共著）・（ぎょうせい）
『高齢者の「こころ」事典』（共著）（中央法規出版社）
『子供の健康』（奥会津書房）
『現代と未来をつなぐ実践的見地からの心理学』（共著）（八千代出版）
『心理学理論と心理的支援』（共著）（ミネルヴァ書房）
『福祉心理学総説』（共著）（田研出版）
『社会貢献学入門』（共著）（TKK3 大学連携プロジェクト共同テキスト開発委員会）
『現代と未来をつなぐ実践的見地からの心理学』（編著）（八千代出版）
『福祉心理学』（編著）（ミネルヴァ書房）他

基調講演

人間の苦について
―原始仏典に見る救済論―

千葉　公慈（東北福祉大学　学長）

講演概要

原始仏典によれば、人は誰しも例外なく「三毒」という煩悩を有するという。「生･老･病・死」の根本苦の原因と位置付ける「貪（とん）（ラーガ）、瞋（じん）（ドヴェーシャ）、癡（ち）（モーハ）の三煩悩である。さらに仏教では、人はこうした複数の煩悩によって、本来的には悟りを開くことが出来るはずの法性（あるいは仏性）が覆われた状態になっているとし、それを「無明」と説く。

かくして三毒は、世間体の裏に隠されているものの、各人の日常の言動を身（身体行為）・口（言語行為）・意（心理行為）にわたって強く支配し続け、とりわけある条件が揃う（これを縁起するという）場面では、それらの行為が突出した形で表出する。その条件（因と縁の起）とは、当人が何らかの要因で追い込まれた状態であることや、群衆にまぎれた匿名の環境にあることなどである。ゆえに現代のネット社会にあっては、まさにその条件が充分すぎるほどに満たされることになる。

この「三毒」について現代的に敷衍すると、「強欲と怒りと無知」というニュアンスに近くなる（ただし同義ではない）が、他方、私たちは経験上「強欲と怒りと無知」の行きつく先には、ある“恐ろしい結末”が待っていることも自覚している。それは根拠のない自己（自民族や自国）の正当化による他者否定の系譜である。現実世界において他者否定の具体例としてもっとも恐れなければならない事象は、暴力と差別（最終的には戦争）という負のスパイラルであろう。

私たちは今、その予兆的現象の“格差と分断”を目の当たりにしつつ、暴力と差別が横行する世界的趨勢のただ中にあるといっても過言ではない。実は歴史的に戦争が繰り返される理由もここにあると思われるが、では何故にこの系譜には歯止めが利かないのであろうか。その疑問を考察する勘所が、とりわけ原始仏典には頻出しており、その一端を示せば次の通りである。

「もろもろの欲望にこだわり、もろもろの欲望にしがみつくものは、
結使（=煩悩に操られていること）にある自己に過ちを見ることはない」
『自説経』七、三

ゴータマ・ブッダの言葉を伝える「小部」第三経の『自説経』には、紀元前の当時の様子がリアルに記述されており、古（いにしえ）の出家者たちによる苦悩の発露を今に伝えている。

当時の仏弟子たちは、日々托鉢のために街へと出向き、そこで様々な出来事を見聞しては精舎へ帰房する。すると彼らは、さっそくブッダにそれらを報告するのであるが、その時のコメントのひとつが当該の句とされる。

その日、コーサラ国のサーヴァッティーでは何かの祝いごとがあったのか、街じゅうが大いに賑わっていた。中に

は泥酔した者、踊り耽る者、大声で喧嘩をする者たちが多くいたようで、「人々は度を過ぎて大いにもろもろの欲望に執着す」と仏典は記している。

その様子に仏弟子は、何か人間の本質的な問題を感じたがゆえに直ちにブッダに仔細を伝えたものと推測する。ブッダによると、「三毒の結使にある者は、決してその欲求の過失を自覚することはない」という回答であった。「結使」とは無意識下に束縛、操作されることで、三毒は天使の顔をして人を惹きつけ、縛りつけたまま、どこまでも陶酔させる魔物（マーラ）であり、かくしてブッダは、人間の苦の本質的な問題を提起するに至る。

今回の講演では、こうした原始仏教の扱う人間の苦をめぐる諸問題を論じる予定である。

プロフィール

【略　歴】

1964年、千葉県市原市朝生原生まれ。
駒澤大学大学院人文科学研究科博士後期課程満期退学（文学修士）。
駒沢女子大学教授、曹洞宗教誨師を経て、現在は東北福祉大学学長および
学校法人梅檀学園常務理事。東北福祉看護学校校長。
大本山永平寺公開講座講師。曹洞宗宝林寺第24世住職。
曹洞宗寺族通信教育委員会委員。㈱小湊鐵道取締役。
千葉県市原市「いちはら観光大使」。地域おこし隊「いっぺあ de 渓谷」代表。
2017 年グッドデザイン賞受賞（受賞番号 17GO70631）。
専門分野はインド仏教教理学。日本文化論。
テレビ、雑誌、講演などで仏教の教えや生き方を説く。
また民俗学や日本人の思想にも造詣が深い。

【著　書】

著書（単著）
『知れば恐ろしい日本人の風習』
『仏教から生まれた意外な日本語』
『心と体が最強になる禅の食』
『うつが逃げだす禅の知恵』
『お寺と仏教』 以上 河出書房新社
『祖師に学ぶ禁煙の教え』 仏教タイムス社
『心に花を咲かせる言葉』 双葉社
『運がよくなる仏教の教え』 集英社（萩本欽一・千葉公慈共著）ほか。

※曹洞宗誌『てらスクール』にて「こちらてんぐ山 おてら掲示板」月刊連載中。

会 員 集 会 次 第

開会の辞

理事長挨拶

名誉会員・推薦会員報告

各賞授与

大会発表継続賞授与

大会長挨拶

次期大会長挨拶

閉会の辞

学会賞受賞者講演

発達支援における親支援の重要性
―発達段階に応じたよりよい支援の検討―

尾花　真梨子（江戸川大学社会学部人間心理学科　准教授）

講演内容

このたびは奨励賞をいただき、誠に光栄に存じます。丁寧にご指導いただきました先生方、研究や臨床実践にご協力いただいた皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

私はこれまで、子どもの学校適応に関心を持ち、主に攻撃性の観点から検討を進めてまいりました。それと並行して、心理職として発達支援や子育て支援に従事し、特に広く発達の障害を抱えるお子さんとそのご家族、彼らを支える保育者や教師、支援者が持つさまざまな困難さに触れる場面がありました。現在、我が国では、発達障害者支援法において家族支援の重要性が謳われ、発達障害者支援施策として「ペアレント・トレーニング（parent training；PT）」の普及が推進されています。PT は、親が子どもに対する適切な支援方法を身につけることで、子どもの行動の改善や発達の促進を目指す介入アプローチであり、多くの医療機関や相談機関で積極的に行われています。近年では、その対象が青年期にまで拡大され、PT の枠組みを援用した「ティーチャーズ・トレーニング」が実践されるようになるなど、多様なプログラムが開発・実践されるようになってきています。子どもたちの健やかな育ちを保障するために、周囲の大人が工夫できることとは何か、親支援という文脈での効果的な専門家同士の協働とはどのようなものか、そのようなことを考えながら日々の研究・臨床実践に向き合っております。

今回の講演では、特に発達上の困難さを抱えるお子さんやその周囲にいる大人への支援に焦点を当て、PT を中心とした親支援における工夫や配慮等について、これまでの臨床実践を基に皆様と共有できれば幸いです。

プロフィール

栃木県出身。東京学芸大学大学院教育学研究科修了、筑波大学大学院 3 年制博士課程人間総合科学研究科単位取得後満期退学。修士（教育学）。公認心理師、臨床心理士。東京学芸大学教育実践研究支援センター特任講師、立正大学心理臨床センター助教を経て、2018 年より現職。大学附属心理相談センター併任教員を務める傍ら、幼稚園のカウンセラーや発達支援に携わる専門職向けの研修講師などを務めている。

主な著者・論文

・尾花 真梨子・濱口 佳和・江口 めぐみ (2013). 児童の関係性攻撃と適応との関連の検討　筑波大学発達臨床心理学研究, **24**, 35-42.

・尾花 真梨子・沖 郁子・秋山 舞香・上田 聖・郷 昇旺・小島 慶子・宍戸 孝明・中莖 里実・長野 笑美・皆川 佳織・中田 洋二郎 (2016). ペアレント・トレーニングへの参加による“気づき”の検討　立正大学臨床心理学研究, **14**, 65-83.

・尾花 真梨子・桑原 千明・水野 雅之・皆川 佳織・古屋 真 (2017). 小学生の攻撃行動生起に対する認識の検討―場面と動機の観点から―　立正大学臨床心理学研究, **15**, 9-17.

・尾花 真梨子 (2019). 自閉スペクトラム症の男子高校生の母親に対する心理面接過程 ―就労移行期における障害受容に着目して―　カウンセリング研究, **51**, 168-177.

・尾花 真梨子・倉田 由美子・神崎 亮佑 (2022). 大学生の認知した親からの期待と養育態度がアイデンティティに及ぼす影響　江戸川大学紀要, **32**, 165-174.

学会賞受賞者講演

「ありがとう」の気持ちを育み、表明すること
―児童期における感謝研究の動向と研究報告―

藤原 健志（新潟県立大学）

講演内容

この度は、「日本カウンセリング学会奨励賞」を受賞し、大変光栄に存じます。これまでご指導・ご支援いただいた多くの皆様へ、この場を借りて感謝申し上げます。

これまで私が取り組んできた研究テーマのうち、今回は児童期の感謝について、お話させていただきたいと思います。感謝の心理学的研究は2000年代より研究数が増加し、最近では子どもを対象とした研究も見られるようになりましたが、日本ではかねてより、学習指導要領において取り上げられており、学校教育の中で長く大切にされている概念です。教育にも「エビデンス」が求められる時代ですが、感謝の気持ち（を抱き、これを表明すること）をどのように育むのか、そして子どもたちにとってどのような点で有益であるのか、これまでの私共の取り組みをご紹介しつつ、近年報告が増加している実践研究の成果についても、時間の許す限りレビューさせていただきたいと思います。

プロフィール

筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻（3年制博士課程）修了、博士（心理学）・公認心理師・臨床心理士。筑波大学人間系（附属学校教育局）・特任助教、埼玉学園大学人間学部心理学科・特任講師等を経て、現在は新潟県立大学人間生活学部子ども学科・准教授。

主要著書・論文

・渡辺弥生（監修）　藤枝静暁・藤原健志（編著）（2021）. 対人援助職のための発達心理学　北樹出版

・藤原健志・村上達也（2020）. 小学生における特性感謝と抑うつの関連 教育心理学研究 , **68**, 311-321.

・藤原健志・濱口佳和（2020）. 高校生における基本的社会的スキルと適応感の関連の短期縦断的検討 ―新入生と上級生の比較― カウンセリング研究 , **53**, 12-25.

・藤原健志・濱口佳和（2015）.　高校生における聴くスキルと外在化問題・内在化問題の関連の検討 カウンセリング研究 , **48**, 228-240.

・藤原健志・村上達也・西村多久磨・濱口佳和・櫻井茂男 (2014). 小学生における対人的感謝尺度の作成 教育心理学研究 , **62**, 187-196.

・藤原健志・濱口佳和（2013）.　高校生用聴くスキル尺度改訂版の作成　心理学研究 , **84**, 47-56.

・藤原健志・濱口佳和（2011）. 高校生の聴くスキル尺度作成ならびに親和動機・学校生活満足感との関連の検討―聴くスキルと主張スキルの対人関係における役割とは ?―　カウンセリング研究 , **44**, 299-312.

大会準備委員会企画シンポジウムI

義務教育システムの限界と課題

企画・司会：中村恵子（東北福祉大学）
話 題 提 供：新井　肇（関西外国語大学）
坂本條樹（共立女子大学）
高原晋一（元名古屋市職員）
指定討論者：諸富祥彦（明治大学）
小林正幸（東京学芸大学名誉教授）

＜企画趣旨＞

学校教育は教師と子供の両輪で成り立っています。ところが、2022 年の文科省の調査では、児童生徒の不登校率・自殺率ともに過去最多を数えました。さらに子供の数は過去最少を更新し続けるのに、特別支援教育の対象児は増え続けて過去最多となり、学級内で発達障害傾向が認知される子供の割合も上昇が続いています。

一方、教師の傷病休暇も精神疾患も過去最多、教員採用試験の倍率は下がり続け、日教組の調査によると 2022 年は定員未配置の学校数も過去最多となりました。OECD 国際教員指導環境調査での日本の教師の特徴は、授業や生徒への指導時間は世界の平均以下なのに仕事時間は世界最多、指導効力感と職能開発時間は他を圧倒して最下位という惨状です。

他方、フリースクールや不登校特例校は問い合わせが殺到し、新設校が続々とオープンしています。日本の義務教育システムに瓦解が起きているとしか思われません。

私たちは、この危機をどのように読み解き、対処すればよいのでしょうか。本シンポジウムでは、学校臨床に深く携わってきたエキスパートを登壇者に迎え、現在の日本の義務教育が直面している未曾有の危機に潜伏する課題と対策について検討します。

「教員のバーンアウトの現状と背景および抑止の方向性と課題」（新井　肇）
－小・中学校新任教員のバーンアウト調査からみえてきたもの－

日本の教育現場において、教員志望者の急激な減少と新任教員の離職の増加が大きな問題となっている。その背景として、過重労働やメンタルヘルスの悪化などの影響が指摘されている。そこで、新任教員特有の職務ストレッサーとバーンアウトとの関連性に関する調査結果をもとに、新任教員を中心に、教員のバーンアウトの現状と背景、および抑止するための取り組みや職場環境改善の方向性と課題について検討したい。

「通常の学級における特別支援教育の可能性と限界」（坂本條樹）

通常の学級に在籍する児童生徒の 8.8%に発達障害の疑いがあることが示され、そのうち「校内委員会」で、特別な支援が必要とされたのは 28.7%だった。この調査から多くの困難を抱える児童生徒への支援は担任の配慮に委ねられている現状が明らかになった。困っている児童生徒への個別支援と日々の教育課程をこなすことは、トレードオフの関係なのだろうか。ここでは、通常の学級における特別支援教育の可能性と限界について議論する。

「対話と協働に基づくシステム」（高原晋一）

日本では、教員による一律の価値判断に基づく学校教育が、子供の唯一の選択肢になっている。スクールカウンセラーも、専門的な知見を活かすというよりも、教員の価値観に合わせて働くのが当たり前になっている。教員自身も、「みんなと同じ」にしなければならず、個性が発揮できない。真の意味での対話がなく、協働が成立しない。一律の価値よりも、人間の幸せに焦点を当てたシステムに転換するための発想を検討する必要がある。

大会準備委員会企画シンポジウムⅡ

震災の経験から考える VUCA 時代のこころの支援

企画・司会：高木　源（東北福祉大学）
話 題 提 供 ：二本松直人（福島県立医科大学）
野口修司（香川大学）
柴田理瑛（東北福祉大学）
指定討論者：伊藤正哉（国立精神・神経医療研究センター　認知行動療法センター）

＜概要＞

昨今の社会情勢は、変動性、不確実性、複雑性、曖昧性が高まっていることを感じさせる。東日本大震災の経験は、こころの支援の在り方を問われる機会でもあった。そして、多くの支援者が様々な立場から、困難な状況の中で支援に取り組んできた。このような経験は、震災という限られた状況のみならず、VUCA 時代におけるこころの支援の在り方に対しても示唆を与えるものだといえる。そこで、本シンポジウムでは、VUCA 時代に求められるこころの支援について、震災の経験から考えたい。

また、震災において福島県では、避難区域が設定され、多くの人が家もコミュニティーも喪失する事態に直面した。そのような被災の当事者としての経験を踏まえて、被災者に対するインタビュー調査を行った結果から、VUCA 時代のこころの支援について話題提供をいただく。さらに、震災後の社会状況は支援者の支援を必要とする状況でもあった。支援者を支援することは、充実した支援を継続的に提供するために不可欠の要素だといえる。そこで、震災後の保育士および公務員を支援した経験から、VUCA 時代のこころの支援について話題提供をいただく。最後に、各シンポジストの話題提供を受けて、「VUCA 時代のこころの支援の在り方」について、指定討論を頂戴する。

カウンセリング心理士会企画シンポジウム

カウンセリング心理士活動最前線

司　　会：井ノ山正文（カウンセリング心理士会副会長）
話題提供者：森本哲介（兵庫教育大学）
飯田光子（NPO 法人長野県子どもサポートセンター）
武藤幸枝（茨城県保健福祉部子ども政策局少子化対策課 子どもの居場所づくり アドバイザー、発達障害者・障害児支援）
小林正幸（東京学芸大学）
指定討論者：諸富祥彦（明治大学）

＜企画趣旨＞

現在、カウンセリング心理士会の会員数が減少している。これは、本資格の社会的認知や活動の在り方などが課題であると推察している。

今後、このような状況を変えていくためには、カウンセリング心理士資格の社会的認知度を高めること、カウンセリング心理学に基づく実践が現代社会において必要とされること、そして、社会貢献という目的を具体化していくことと考えている。

その為にはどのような取り組みが有効になるか検討すること、そしてカウンセリング心理士としての活動状況を検証することが急務である。

今回のシンポジウムでは、カウンセリング心理士会の特徴でもあり、良さでもある「多様性」をどのように活かし実践的な場面で展開しているかについて考えたい。

さまざまな背景を有し、学際的な研究を行っている会員、日々様々な現場の先頭に立って実践に取り組んでいる会員、多くの会員の方々がさまざまな領域で活躍されていることこそカウンセリング心理士会の強みとなっている。

しかし、これらを有機的に繋ぐことによって更にカウンセリング心理士会の活動を広げていくことが求められているのではないだろうか。

このような問題意識を持ちながら本会会員が活動しているそれぞれの現場の状況を紹介し、その現場の取り組みから見えてくる様々な事象について考察し、今後の活動に繋がるような提案を行っていきたい。

若手・中堅の会企画シンポジウム

若手・中堅が想像（創造）する、これからのカウンセリング

企　　画：日本カウンセリング学会 若手・中堅の会
企画・司会：新井　雅（跡見学園女子大学・本学会若手・中堅の会）
話 題 提 供：下條杏納（跡見学園女子大学大学院人文科学研究科臨床心理学専攻）
西塚拓海（北海道医療大学大学院心理科学研究科博士後期課程・医療法人研成会 札幌鈴木病院）
鎌田真実（北翔大学）
指定討論者：田中勝則（北海学園大学・本学会若手・中堅の会）

＜概要＞

予測困難で不確実、複雑で曖昧な状況（volatile、uncertain、complex、ambiguous：VUCA）が、より一層進行している近年の社会において、人々の多様な生き方を支えるカウンセリングの役割は重要性を増している。様々な個性や背景を有する一人一人が、苦悩や困難を乗り越え、心身の健康を保ちつつ、相互に協調し、自分自身や家族、地域コミュニティ、社会全体のウェルビーイング（well-being）を目指してより良く生きていくことができるよう、カウンセリングの実践・研究・教育等に関わる者はどのような役割を果たすことができるかが大きく問われていると考えられる。

特に、目まぐるしく変化し続ける社会情勢の中では、カウンセリングに関して伝統的に行われてきた実践・研究・教育の在り方を大切にしつつも、新たな視点でそれらの活動を柔軟に変化・発展させていくことも重要である。ここでは、必ずしも何らかの「答え」や「正解」があるわけではなく、誰かが明確な「答え」や「正解」を知っており、そこへと導いてくれるわけでもないため、カウンセリングに関わる様々な専門家・関係者等が対話を重ねながら、新しく、かつ将来的にも持続可能なカウンセリング活動を協働して創り上げていくことが必要となる。

そこで本シンポジウムでは、若手・中堅の立場から、これからのカウンセリングの実践や研究、教育などの在り方について、自由な発想で議論を行いつつ、新たな取り組みや手立てを想像し、創造していくための示唆を得ることを目的とする。ここでは、「現実的にできるかわからない」「今まで行われてきたことがない」などといった考えで安易に思考を停止させてしまうのではなく、また、誰かに「こうしてほしい」「ああしてほしい」といった他人任せの議論ばかりに終始するのでもなく、将来のカウンセリング活動の主要な担い手となる若手・中堅達自身が、「どのような取り組みをしていきたいか」、「どのような活動、キャリア、ネットワークなどを展開していきたいか」、「そのために自分達はどのようなことができるか」などを、自由に楽しく前向きに議論していくことができるような場としていきたい。

S-1

カウンセリングの統合的アプローチ・EAMAの実際とその可能性（その１）
――オープンカウンセリングの動画を見ながら語りあう――

司会者　　諸富祥彦（明治大学文学部）
話題提供者　田村朋子（西宮市役所）
豊田文子　（東京カフェカウンセリング）
跡部太鼓（　講師道錬成道場　雙志館）
高村美賀（カウンセリングルーム・シャンティ）
中川正（三重大学人文学部）
指定討論者　櫻本洋樹（NTT東日本伊豆病院）

はじめに

EAMA（Fully Experiencing-Awareness-Meaning Approach〈体験-アウェアネス-意味生成アプローチ〉）は、諸富祥彦が考案した、人間性心理学やトランスパーソナル心理学のさまざまなアプローチ、とりわけ、ロジャーズの深い傾聴をベースにした統合的アプローチである（諸富　2022）。

ＥＡＭＡにおいてクライエントは、自らの内的な体験をじゅうぶんに体験する。一人では探索し体験しつくせずにいたみずからの内的な体験を、より広く、より深く、さまざまな視点からじゅうぶんに体験し体験しつくすこと―これを原理原則として多様な技法を駆使していく。

個人セッションであれグループセッションであれ、カウンセラーはクライアントに「なる」ことに徹する。クライアントに「なる」。「なりきる」。なりきったまま「クライアントのこころの世界」を「共に体験する」。

なぜそうするのか。人は一人では、自分の内側の体験をじゅうぶんに体験することができないからである。人は、その内側でさまざまなことを体験している。そして、そのさまざまな内的体験はそれ自体「もっと体験されたがっている」。しかし、人は一人では、なかなか自分の内側深くにしっかり入っていくことができない。内側の体験は多くの場合、放置されたままである。私たちの内側で生じているさまざまな体験は、私たち自身にいわば、ネグレクトされているような状態にある（内的なセルフネグレクト）。それが、人のこころや人生の展開を妨げ停滞させている。

EAMA のセッション

ＥＡＭＡでは、個人セッションであればカウンセラーが、グループセッションであれば他のメンバーも一緒に、クライアントになりきって「一つ」になり、そのこころの世界を「共に体験する」。クライアントの内的体験のエッセンスを、あたかもそれが今その場で起きているかのように、ありありと「現前化」し「映し出す」。グループのメンバー一人一人が、クライアントの「人生」という「作品」のいくつかのパーツになったかのような仕方で、グループ全体でクライアントの内的体験のエッセンスをありありと「現前化」し「映し出す」。クライアントは自分の内側ですでに生まれていた体験、しかし本人からじゅうぶんな注意を払われることなく半ば放置されていたその体験を、セラピストや他のメンバーと共に、よりじゅうぶんに体験する。するとクライエントの内的プロセスは一歩前に進む。

EAMA は、EFT や AEDP と同様、諸技法を assimilative integration「同化・統合」したアプローチである。しかし、その代表的な技法である「なりきり」によるクライエントの内的世界の「映し出し」（現前化）などは、他のアプローチの臨床家が活用いても、有効性の高い技法であると思われる。

本シンポジウムについて

本シンポジウムでは、２つのグループセッションをとりあげ、EAMA の実際を動画で見ていただく。他のアプローチ同様、EAMA も、セッションの実際を見ていたかないと、なかなか理解は難しいからである。

それをもとにシンポジストがそれぞれ次の視点から話題提供をおこなう。

田村と豊田は今回提示するセッションのクライアントの立場から、セッションを振り返り、EAMA の代表的技法である「なりきりによる現前化」によって「自分が映し出される体験」とその意味について語る。

高村は EAMA のトレーニングを受ける立場から、「なりきることの有効性とその難しさ」について語る。

跡部は、EAMA における体験の深さについて、また他のアプローチとの異同について語る。

中川は「EAMA が生み出す時空間」について語る。

最後に櫻本が、フォーカシング指向の心理療法の実践家の立場から、指定討論をおこなう。

文献：諸富祥彦（2022）自己探究カウンセリング入門　EAMA（体験―アウェアネス―意味生成志向アプローチ）の理論と実際　誠信書房

キーワード：EAMA,統合的アプローチ,現前化

S-2

ひきこもり状態にある人やその家族への心理的支援の役割

司会者・指定討論者　野中　俊介（東京未来大学こども心理学部）
話題提供者　平生　尚之
（ひょうご発達障害者支援センター クローバー 加西ブランチ）
久保　浩明（宮崎大学医学部）
境　泉洋（宮崎大学教育学部）
指定討論者　深谷　守貞（ＫＨＪ全国ひきこもり家族会連合会）

はじめに

ひきこもりとは，６ヵ月以上にわたり社会的参加を回避したり家庭内にとどまり続けたりすることを特徴とする状態と定義される（齊藤，2010）。このような状態にある人は日本において 15～39 歳は 2.05%，40～64 歳は 2.97%に及ぶと最近の調査によって推定されている（内閣府，2023）。その一方で，年齢やひきこもりに至る経緯（内閣府，2019），背景に存在する精神疾患（Kondo et al., 2013）など，ひきこもりの状態像はきわめて多様であり，それらの状態像に応じた体系的な支援体制は必ずしも確立されていない現状にある。また，最近はいわゆる「8050 問題」などとして，ひきこもりの高年齢化が注目されており，福祉的支援の必要性が強調されている。そのような社会的注目が高まるなか，ひきこもり状態にある人やその家族に対して，心理的支援や心理的アセスメントはどのような役割を担うことができるのかを整理することは，支援全体のなかでの心理職の位置づけを明確にするためにも重要であろう。心理職の役割を明確にする際，ひきこもりケースの多様性を考慮すれば，特に支援の初期段階においてアクセスが多い家族支援や，効果的な支援体制を構築するための支援者支援，生きづらさを抑制して生活の質を高められるような地域資源を整備するための地域支援など，さまざまな側面からの議論が求められると考えられる。

そこで本シンポジウムにおいては，平生尚之氏に家族支援における知見，久保浩明氏には支援者支援における知見，境泉洋氏には地域支援における知見について報告を行う。そして家族会に所属しながらソーシャルワーク業務に従事する立場から，心理的支援の役割などについて深谷守貞氏から指定討論を行う。それらを通して，ひきこもり状態における心理的アセスメントを含む心理的支援の実際とその役割，および今後の課題について議論することを予定している。

家族支援（平生尚之）

ひきこもり支援において，家族は最初の相談者となることが多い。一方で，家族支援の進め方について地域支援者は悩むことが多く，家族支援を考えるうえで，支援者支援と地域支援体制の整備の視点は欠かせない。

兵庫県では，2015 年より発達障害特性を背景とするひきこもり状態にある方の家族支援として「クローバーCRAFT プログラム」を開発し，全県で実施している。本発表では，家族支援においてエビデンスを重視した施策を県レベルで推進してきた経緯を報告するとともに，家族支援における地域課題についても言及する。

支援者支援（久保浩明）

支援者を対象に報告者が実施したインタビュー調査から，個々の支援者支援にはスキル習得だけでなく，支援者の傷つきや無力感といった困難感を考慮する必要性が確認された。さらに，支援者の間でひきこもりへの理解や態度に差がみられ，支援体制構築や連携の困難さ，支援者自身の孤立リスクも示唆されている。こうした課題に対して，ひきこもりへの多様で柔軟な理解を深める視点を取り入れた萌芽的な支援者支援の取り組みについて紹介し，支援者を対象とした心理的支援の意義について議論を深めたい。

地域支援（境 泉洋）

地域支援には，地域の理解を促進し，ひきこもりを生まない社会，ひきこもりから社会につながれる社会づくりを目指す。後者においては，ひきこもり経験者が働ける場の創出が有効である。境氏が行った調査によると，ひきこもり経験者の 7 割近くは就労の意欲がある。その一方で，就労時に傷つく体験をした人も少なくない。また，受け入れる職場側もどのような配慮が必要かわからず手をこまねいている現状がある。こうした現状を打開すべく，ひきこもり経験者が就労する際に求める配慮について話題提供を行う。

指定討論（深谷守貞，野中俊介）

深谷氏は，全国に 50 以上の支部をもつ，ひきこもり家族会のなかで社会福祉士として社会制度活用などを含むソーシャルワーク業務に従事しており，こうした背景をもとに各演者の発表をふまえて討論する。

キーワード：ひきこもり，心理職，心理的支援

S-3

対人関係ゲームのさらなる可能性を求めてⅧ

～学級システムづくりのサポートの一助として～

企画・司会　西澤　佳代（長野障害者職業センター）
話題提供者　小池　良江（長野市立三陽中学校）　松澤　裕子（須坂市立高甫小学校）
北澤　琢也（長野市立大豆島小学校）　吉田　希（長野県若槻養護学校）
指定討論者　岸田　優代（信州大学）　田上　不二夫（筑波大学）

企画趣旨

田上（2018）によれば，対人関係ゲームとは，言語的・非言語的に人とかかわり合う遊びを使って，人と人とを心理的につなぐカウンセリング技法である。対人関係ゲームによる学級システムづくりは，この四半世紀，学級の満足感・親和性を高める，孤立児と学級の関係性の改善などの事例や研究が報告されてきた。

本自主シンポジウムでは，養護教諭として，管理職として，学年主任として，特別支援学校の教育相談としてなど学級担任をサポートする立場から，対人関係ゲームの可能性について論じる。

提案内容

対人関係ゲームの実施で，児童生徒は学級での人間関係がよくなり，学校での活動が楽しくなり，安心して登校でき，学習成果があがるのではないか。また，それによって悩んでいた学級担任が、自信をもって学級経営にあたるサポートとなった事例を提案する。

小池良江：教科担任と養護教諭の連携による不登校生の支援

中１のＡ子は夏休み開けから登校をしぶり，２学期は30 日以上の欠席があった。チーム担任制のため２週間ごとに窓口担任が替わることも，安心して教室に入れなくなった要因であった。養護教諭の元にはそういった情報が集まり，Ａ子が２年生になるまでにはクラスに入れるようにと，関係者会議を行った。3 学期から英語の授業のウオーミングアップとして３分程度，後だしジャンケン・ギョウザジャンケン等の対人関係ゲームを計画し，繰り返し実施したところ，それが教室に入るきっかけになり，必ず英語のある時間から登校できるようになった事例を，養護教諭の立場から報告する。

松澤裕子：管理職として学級担任を支えた学級集団づくりについて

居場所を感じ，安心で温かな学級の環境になっていくために，担任の学級集団づくりへのサポートを行った。筆者がモデルを示しつつ，人間関係づくりや学級集団づくりについて具体的な支援をしながら，担任と共に対人関係ゲームを学級集団に実施した。学級集団の中での友だち同士の関わりが深まり，友だちから認められる体験をすることにより，安心感をもてる学級の雰囲気が作られた。担任による学級集団づくり，関係性づくりをマネジメントした筆者から報告する。

北澤琢也：小学校における学年主任としての支援

話題提供者の学校では，6 学年において教科担任制を取り入れ，4 人の担任が全ての学級に入るようにしている。話題提供者は，学年主任であり 4 クラスの算数の教科担任として全クラスに入り，導入の場面において短時間で「アドジャン」を実施してきた。勝ちを数えるのだけではなく，「たくさんの人と」や「負けた数」など変化を意識して取り組んでいる。その積み重ねの中で，それぞれの学級で生徒指導上に気なる児童や不登校傾向のある児童について担任と情報共有したり関係性を向上させたりしてきた事例を報告する。

吉田　希：特別支援学校のセンター的機能として地域の学校の先生と共に集団づくりに取り組んだ事例

居心地のよい集団づくりは，不登校の未然予防，インクルーシブ教育推進のための大切な取り組みであり，地域の学校からの相談ニーズも高い。特別支援学校のセンター的機能として，教育相談を担当している筆者から，「対人関係ゲーム」をコンサルテーションに取り入れた実践を報告する。「探偵ゲーム」を題材にし，学級担任が思いを寄せる子どもについて話を聞きながら，一緒に質問項目を考え，デモンストレーションをした事例を通して，学級担任が主体的に実践に取り組むためのサポートのあり方について考察する。

キーワード：対人関係ゲーム，学級担任のサポート，学習成果，学級集団

S-4

環境に働きかけるグループカウンセリング

企画者・司会者　井ノ山正文（教育環境センター）
話題提供者　宮前　淳子（香川大学）
井ノ山　正文（教育環境センター）
青戸　泰子（関東学院大学）
指定討論者　田上　不二夫（筑波大学）

企画趣旨

対人関係ゲーム（SIG：Social Interaction Games）には、子ども同士に協力関係があり、学級への所属意識や愛着が湧き、自分が役立っているという実感が持てる「群れ」というイメージがある（田上,2003）。また、個が成長する学級環境（システム）を形成する学級システムプログラム（CSP）は、SIG を使って教師と子ども、子ども同士に交流を生み出し、学級システムの発達を促進するプログラムである（田上,2017）

SIG は、これまで多くの学校現場で取り組まれてきた経過があり、不登校・いじめ・授業の成り立たない学級の課題、特別支援教育などで活用され成果を上げてきた。そして、成果を上げてきた背景には児童生徒自身の変容を求めることを主目的とせず、日常生活の人間関係を改善することに主眼に置いたことがある。この考えを支える理論のひとつは、コミュニティ・アプローチである。心理療法はクライエントの個人のパーソナリティ変容や行動変容を目指すが、コミュニティ・アプローチはコミュニティに介入し、コミュニティの変容によってそこに属する個への影響を目指す。

SIG が展開できる場は、学校教育のみならず福祉を始めとする多くの分野に可能性を持つ。社会的な相互作用が環境に影響を与え、人間関係を形成していくことの可能性について共に討議したい。

宮前淳子「教職員間の連携・協働を促進するための SIG の活用」

現在，学校では教育課題が急速に多様化・複雑化しており，教員一人ひとりが担う業務の範囲がますます拡大している。多忙さや教員の年齢構成の歪さといった職場環境に関する問題が指摘されるなか，同僚とのコミュニケーションに困難を感じ，悩みがあっても相談できず，一人で抱えこんでしまう教員も少なくない。また，チーム支援の重要性は頻繁に聞かれるものの，実際には，チームの構成員としての意識が希薄であったり，チームで目標を設定したり共有したりすることが難しい場合も見られる。そのため，学校で各教員が同僚と良好な関係を構築し，安心感を持って働くことができる雰囲気や環境を醸成することが求められている。そこでシンポジウムでは，こうした教職員間の連携・協働に関する課題を整理し，SIG をきっかけとした職場環境の変容について紹介するとともに，課題解決に向けた SIG の可能性について検討したい。

井ノ山正文「福祉現場における環境調整」

昨年 8 月に開催された国連「障害者の権利に関する委員会」では「障害の医学モデルの要素を排除すること」が求められた。障害を個人要因だけではなく環境要因との関連で考慮することも国際生活機能分類（ICF）において示されている。しかし、福祉現場等においては個人要因に着目する傾向がある。環境調整によって対人関係が変化し、障害者自身の成長促進にも寄与した経過について報告したい。また、その際に SIG 及びマインドフルネスの取組を行った。これらのことから SIG の可能性についても言及したい。

青戸泰子「不登校生徒への援助におけるコミュニティ・アプローチ」

文科省（2016）は、「不登校を問題行動としてはならない」との見解を含む通知を出している。しかし依然として、その要因を個人の問題と捉えている見方は多い。一方で、教員の多忙さが指摘されている中で、その支援は、担任中心に任せられてしまう現実もある。不登校は「個人内要因と環境要因が折り合わない時に生じる」とすれば、個人への支援だけでなく、学校の環境要因に働きかけることで不登校支援に寄与できるのではないか。そこで今回は、不登校生徒へ将来像をイメージさせた「自己プランニング・プログラム」を活用した個人への支援と、学校全体で不登校児童生徒を支援するシステムづくりを紹介したい。さらには、不登校の未然防止と児童生徒の社会的自立を視野に入れた SIG の可能性についても共に考えたい。

キーワード：SIG，コミュニティ・アプローチ，チーム支援，環境調整，不登校支援システム

ポスター発表

【心理支援】

▶ **P-1** Brief Fear of Negative Evaluation Scale 日本語版の信頼性と妥当性の検証

野田　昇太（Philipps University Marburg, Department of Psychology）
大川　　翔（千葉大学子どものこころの発達教育研究センター）

▶ **P-2** 現実的楽観主義と感謝との関連に関する一研究

Nishaat Aneesah（創価大学）

▶ **P-3** 信頼感に影響を及ぼす経験とレジリエンスの関連

川原　正人（東京未来大学こども心理学部）
中村日奈子（サンスイ）

▶ **P-4** 精神的自己受容に関する一研究

篠田　直子（信州大学学術研究院教育学系）
中村　梓希（長野市社会事業協会）

▶ **P-5** COVID-19 下での日常生活における不自由さの推移とストレス

難波久美子（武庫川女子大学子ども発達科学研究センター）
河合　優年（武庫川女子大学子ども発達科学研究センター）
田中　滋己（国立病院機構三重中央医療センター）

▶ **P-6** 心理臨床家のクライエントに対する自己愛的関わりについての仮説生成型研究

成澤　佑太（東京福祉大学　学生相談室）

▶ **P-7** 心理面接を通して心理臨床家が感じる精神的負担感についての質的研究

髙屋　優希（株式会社国立療育センター　児童はったつ支援室まるソラ）
藤田　博康（駒澤大学文学部心理学科）
本多　　綾（駒澤大学文学部心理学科）

▶ **P-8** 模擬カウンセリング場面で観察された共感的理解を伝える発話の特徴
～マイクロ・カウンセリングの観点を取り入れた対話構造の検討～

福島　和郎（多摩リハビリテーション学院専門学校）
小野寺敦志（国際医療福祉大学）

▶ **P-9** アタッチメントスタイルとカウンセリングの利用意思に関する検討

塚越菜緒子（東京大学大学院教育学研究科）

▶ **P-10** メモを使った短時間のカウンセリング的アプローチ

上原　　巌（東京農業大学　地域環境科学部　森林総合科学科）

▶ **P-11** 個人面接と合同面接の併用に関する一考察
―神経性やせ症の女子高校生とその母親との心理面接過程から―

石垣真由子（石巻赤十字病院）

▶ **P-12** 箱庭療法に使用する箱の大きさにバリエーションを持たせる意義について

丹治　光浩（花園大学）

▶ **P-13** 親との関係におけるソーシャルサポートの互恵性が心理的ストレス反応に及ぼす影響

権藤　理帆（広島修道大学大学院人文科学研究科）
原田　朋弥（広島修道大学大学院人文科学研究科）
蓑崎　浩史（広島修道大学健康科学部）

▶ **P-14** オープンダイアローグにおけるアフェクションセラピー

高倉　恵子（日本カウンセリング心理学研究所）

▶ **P-15** トラウマが関わる感情調節困難に対する支援の展望

松野　航大（武蔵野大学通信教育部）

▶ **P-16** ボディイメージへの認知行動療法
―ポジティブ心理学的アプローチとネガティブ心理学的アプローチの比較―

高橋恵理子（早稲田大学人間科学学術院）
高橋　拓己（東京電機大学学生相談室）
桂川　泰典（早稲田大学人間科学学術院）

▶ **P-17** 抑うつスキーマがパッションに及ぼす影響

久保　尊洋（横浜国立大学）

▶ **P-18** 中学生におけるマインドフルネスと抑うつ症状との関連

原田　朋弥（広島修道大学大学院人文科学研究科）
権藤　理帆（広島修道大学大学院人文科学研究科）
蓑崎　浩史（広島修道大学健康科学部）

▶ **P-19** セルフコンパッション・マインドフルネス・レジリエンスがストレス反応に及ぼす影響

吉原　　寛（松本大学人間健康学部）

▶ **P-20** 反芻焦点化認知行動療法におけるコンパッションに着目した VR 介入の効果

渡部　雪子（高知大学 / 山梨英和大学）
松村　雅代（㈱ BiPSEE / 高知大学）
上木原広平（㈱ BiPSEE / 高知大学）
小松　尚平（㈱ BiPSEE / 東京大学大学院）

▶ **P-21** 中年期と人生の再考
―自助グループ「Club みなしご集まれ天涯孤独」の活動を通して―

青木　智子（平成国際大学　法学部）
木附　千晶（文京学院大学　保健医療技術学部）

▶ **P-22** 高齢者を対象としたｅスポーツによる認知トレーニングを通じた世代間交流

水國　照充（平成国際大学スポーツ健康学部スポーツ健康学科）

【学齢期の適応】

▶ **P-23** 「よいクラス」の構成概念の検討
―B 小学校 5 年生 1 クラスの作文から―

和久田耕平（大阪府交野市立星田小学校）
米田　　薫（大阪成蹊大学）

▶ **P-24** 小学生における学級適応とエゴ・レジリエンスとの関連

武蔵　由佳（都留文科大学教養学部学校教育学科）
藤原　寿幸（横浜国立大学大学院教育学研究科　高度教職実践専攻）

▶ **P-25** 小中学生におけるレジリエンススキルと不登校傾向との関連（１）

小林　朋子（静岡大学教育学部）
五十嵐哲也（愛知教育大学）

▶ **P-26** 小中学生におけるレジリエンススキルと不登校傾向との関連（２）
―「学業」のストレッサーに焦点をあてて―

五十嵐哲也（愛知教育大学）
小林　朋子（静岡大学教育学部）

▶ **P-27** スクールカースト認知度と学校適応感との関連

北沢　卓也（社会福祉法人飛鳥学院）
中地　展生（帝塚山大学心理学部）

▶ **P-28** 中学生における学校生活満足度とスクールエンゲージメントとの関連

藤原　和政（兵庫教育大学）

▶ **P-29** 学校内システムにおけるコーディネーション
―実践から考えるガイダンスカウンセラーの意義―

布川　裕美（栃木県立小山西高等学校）
熊倉　志乃（國學院大學栃木短期大学）

▶ **P-30** 中学生のソーシャルスキルが抑うつ症状に及ぼす影響
―ソーシャルサポートを媒介要因とした縦断的検討―

新川　広樹（弘前大学教育学部）
本田　真大（北海道教育大学函館校）
冨家　直明（北海道医療大学心理科学部）

▶ **P-31** 紙上討論による学級づくりの効果に関する研究
～集団同一視に焦点を当てて～

吉岡　典彦（長野市立戸隠中学校）

▶ **P-32** パーソナリティ傾向が学校適応に与える影響：メタ認知に焦点を当てて

木下　雅博（東大阪大学短期大学部実践保育学科）

▶ **P-33** 不登校児童生徒のための教育メタバースの効果に関する実証研究（1）
―不登校児童生徒の意識の特徴と変化を中心に―

小林　正幸（NPO 法人元気プログラム作成委員会カウンセリング研修センター学舎ブレイブ）
早川　惠子（NPO 法人元気プログラム作成委員会カウンセリング研修センター学舎ブレイブ）

▶ **P-34** 不登校生徒の支援利用と進路（1）
義務教育終了後の意識と実態との関連

木村　文香（東京家政学院大学現代生活学部現代家政学科）
松岡　靖子（川村学園女子大学文学部心理学科）

▶ **P-35** 不登校生徒の支援利用と進路（2）
―進学までの教育支援センター（適応指導教室）を中心とした支援利用の径路分析―

松岡　靖子（川村学園女子大学）
木村　文香（東京家政学院大学）

▶ **P-36** 不登校の子どもをもつ親のこころの居場所

田島　羊恵（特定非営利活動法人カウンセリング＆コミュニケーション・ミュー）
山本　　泉（特定非営利活動法人カウンセリング＆コミュニケーション・ミュー）

▶ **P-37** いじめ被害者への非難的態度が被害者への有責性意識に及ぼす影響における妬みと被害・加害経験の調整効果

福井　義一（甲南大学文学部人間科学科）
堀　　孝司（甲南大学大学院人文科学研究科）
小山　聡子（さくメンタルクリニック）

▶ **P-38** いじめ被害者への有責性意識の測定方法におけるいじめ被害・加害者の表記やその呈示順序の違いが有責性判断に及ぼす影響

堀　　孝司（甲南大学大学院人文科学研究科）
福井　義一（甲南大学）
小山　聡子（さくメンタルクリニック）

▶ **P-39** 特別支援対象児童の学級適応感とソーシャルスキルの特徴に関する検討
―時期と抱える困難さのタイプを考慮して―

川俣　理恵（島根大学大学院教育学研究科）

▶ **P-40** WISC-IV における GAI と CPI 間に有意差がみられる子どもの日常での困り感

川添　　茜（鹿児島大学障害学生支援センター）

▶ **P-41** ADHD マスキング評価項目の実現可能性および有効性の検討

前田　千晴（早稲田大学大学院人間科学研究科学校カウンセリング学研究室）
桂川　泰典（早稲田大学人間科学学術院）

▶ **P-42** 参画型の半構成的グループ・エンカウンターが自己と他者に対する態度変容に与える効果

浅井　千秋（東海大学文化社会学部心理社会学科）

▶ **P-43** ２つのグループ・アプローチの心理的成長感等への効果の検討
―アドベンチャーカウンセリングと構成的グループ・エンカウンターの比較―

水野　邦夫（帝塚山大学心理学部）
中地　展生（帝塚山大学心理学部）

▶ **P-44** 少人数で人間関係が固定している学級に及ぼす対人関係ゲームの影響

西澤　佳代（長野障害者職業センター）
田上不二夫（筑波大学）

▶ **P-45** 対人関係ゲームによる学級の人間関係づくり
―子ども同士の関わりをつくる学級集団づくりへのサポート―

松澤　裕子（須坂市立高甫小学校）
田上不二夫（田上カウンセリング研究所）

【青年期の適応】

▶ **P-46** 高校生の自殺リスク指標に関する検討（１）

柿沼香穂留（北海道医療大学大学院心理科学研究科）
小林　　萌（北海道医療大学大学院心理科学研究科）
西塚　拓海（札幌鈴木病院）
斉藤　　徳（日本医療大学保健医療学部）
新川　広樹（弘前大学教育学部）
冨家　直明（北海道医療大学心理科学部）

▶ **P-47** 高校生の自殺リスク指標に関する検討（２）

小林　　萌（北海道医療大学大学院心理科学研究科）
柿沼香穂留（北海道医療大学大学院心理科学研究科）
西塚　拓海（札幌鈴木病院）
斉藤　　徳（日本医療大学保健医療学部）
新川　広樹（弘前大学教育学部）
冨家　直明（北海道医療大学心理科学部）

▶ **P-48** 大学生の学習行動に関連する要因の検討
―自己抑制コントロールと登校回避感情に着目して―

菊地　　創（松蔭大学コミュニケーション文化学部）
富田　拓郎（中央大学文学部）

▶ **P-49** 不登校児童生徒に対するアウトリーチ支援事業への参加が教育者を目指す大学生へ与える影響
―複線径路・等至性モデル (TEM) を用いた検討―

桑原　千明（文教大学）
宮地さつき（文教大学）
進士　有美（吉川市役所）
木村みのり（吉川市役所）

▶ **P-50** 正課外活動への参加と精神的健康との関連

田中　　圭（聖徳大学心理・福祉学部心理学科）
沢宮　容子（東京成徳大学応用心理学部）

▶ **P-51** 対面授業と遠隔授業の学習成果に及ぼす心理的要因の影響
―2 年制短期大学の事例から―

中村麻衣子（フェリシアこども短期大学　国際こども教育学科）

▶ **P-52** 大学生における Proactive Coping と不登校傾向の関係

福良　　傑（帝塚山大学大学院心理科学研究科）
中地　展生（帝塚山大学心理学部）

▶ **P-53** 大学生の対人支援ボランティア場面でのストレッサーについての研究
―ソーシャルサポートの種類による効果の検討―

亀田　凌雅（帝塚山大学大学院心理科学研究科）
中地　展生（帝塚山大学心理学部）

▶ **P-54** 対話による大学生の自己理解・他者理解の促進
～リーダーシップ開発の授業を通して～

森　理宇子（共立女子大学）
岩城　奈津（共立女子大学）
齊藤　萌木（共立女子大学）

▶ **P-55** 心理職を目指す学生に対するコミュニケーション能力向上を目指した教育
―大学院生（T.A.）の活用―

田所　摂寿（作新学院大学人間文化学部）

▶ **P-56** LGBTQ 学生に対するキャンパス内でのスティグマが，当事者学生の学校適応に与える影響

佐藤　洋輔（埼玉学園大学人間学部心理学科）

▶ **P-57** 大学生版居場所感尺度の因子構造に関する研究

山口　豊一（聖徳大学心理・福祉学部心理学科）
富島　大樹（清泉女学院大学人間学部心理コミュニケーション学科）

▶ **P-58** 「将来に希望がない」青年の肯定的変容
―心理支援を受けずに希望をもつに至った青年の事例―

坂本　憲治（福岡大学人文学部，カウンセリングオフィス博多）

▶ **P-59** 青年における曖昧さへの態度とその関連要因の検討
―曖昧さへの態度の分類と属性による相違について―

神谷　真奈（聖心女子大学大学院　人文社会科学研究科）

▶ **P-60** 発達に特性のある若者の感情発達の支援のあり方

山本　　泉（特定非営利活動法人カウンセリング＆コミュニケーション・μ）

▶ **P-61** 若者支援ピアサポーターの語りから検討する支援と被支援について

田中小百合（認定 NPO 法人キャリアデザイン研究所）

【キャリア支援】

▶ **P-62** 同僚男性の育児休業取得に関する不公平感喚起状況

尾野　裕美（筑波大学人間系）

▶ **P-63** 保育者における実践力認知と省察およびメンターから受ける支援の関連

森本　哲介（兵庫教育大学）

▶ **P-64** 小中学校教職員に対するメンタルヘルス研修・教材の効果検証

山村　麻予（関西福祉科学大学健康福祉学部健康科学科，大阪大学大学院人間科学研究科）
金子　茉央（大阪大学大学院人間科学研究科）
平井　　啓（大阪大学大学院人間科学研究科）

▶ **P-65** 心理職の働く現状と支援のあり方①
―心身の健康状態の観点から―

西野秀一郎（跡見学園女子大学心理教育相談所）
春日作太郎（からだとことばの臨床心理学研究所）

▶ **P-66** 心理職の働く現状と支援のあり方②
―窮状を支える要因の観点から

春日作太郎（からだとことばの臨床心理学研究所）
西野秀一郎（跡見学園女子大学心理教育相談所）

▶ **P-67** 職業訓練指導員向け対話力育成プログラムの効果検証方法の検討

新目　真紀（職業能力開発総合大学校）
水野修次郎（ライフデザインカウンセリング研究所）

▶ **P-68** 保護司制度における現状の課題と対応策の検討

須賀　仁礼（跡見学園女子大学心理学部臨床心理学科，跡見学園女子大学）
宮崎　圭子（跡見学園女子大学心理学部臨床心理学科，跡見学園女子大学）

【コミュニティ支援】

▶ P-69　低 SES 世帯の子どもにおける言語の状況
—支援者へのインタビュー調査を通して—

飯田　　都（浜松学院大学 現代コミュニケーション学部 子どもコミュニケーション学科）

▶ P-70　子どもサポートセミナー及び動物ふれあい体験の効果
～アンケートによる評価～

飯田　俊穂（安曇野内科ストレスケアクリニック, 長野県子どもサポートセンター）
飯田　光子（安曇野内科ストレスケアクリニック, 長野県子どもサポートセンター）
加藤由美子（安曇野内科ストレスケアクリニック, 長野県子どもサポートセンター）
金澤　正子（安曇野内科ストレスケアクリニック, 長野県子どもサポートセンター）
清水　好美（安曇野内科ストレスケアクリニック, 長野県子どもサポートセンター）
飯田　香穂（安曇野内科ストレスケアクリニック, 長野県子どもサポートセンター）

▶ P-71　地域で求められている生活課題へのメンタルサポート

青木　貴子（カウンセリング＆コミュニケーション・μ）
山本　　泉（カウンセリング＆コミュニケーション・μ）

一般社団法人　日本カウンセリング学会第 55 回大会　準備委員会
東北福祉大学総合福祉学部福祉心理学科

委員長	渡部純夫
副委員長	三谷聖也
事務局長	中村恵子
準備委員	柴田理瑛
	高木　源
	武村尊生
	内藤裕子
顧問	笈田育子（NPO 法人カウンセリング教育サポートセンター）

一般社団法人日本カウンセリング学会第 55 回大会準備委員会
〒 981-0943 宮城県仙台市青葉区国見 1 丁目 8 － 1
東北福祉大学 2 号館 4 階　合同研究室
E-mail:jacs55office@gmail.com